
家庭教師ヒットマンREBORN！ ～転生者と天体7属性来る！～

koreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ ～転生者と天体7属性来る！～

【Nコード】

N1981X

【作者名】

koreel

【あらすじ】

極普通（？）の中学生、さいとう 斉藤 くろいつ 黒一

運動神経は上々。勉強もそこそこだが、人付き合いが悪くいつも一人。

そんな、一匹狼な斉藤 黒一は普通にヤクザにボコされて死亡。

さあ、どうするかとなった時にお約束(?)の神様が登場！

何か、REBORN!の世界に転生させてくれるみたいで・・・。

作者のオリ設定も入ると思います。他、原作を覚えているか・・・。

不定期気味な更新です。それと、天体の守護者は登場遅くなるかも・・・。

ブログ・転生者（前書き）

はい、koree1です。小説を書くのは、初めてじゃないですが文章力がちよつと・・・。

というわけで、REBORN！オリジナルverスタートです。

プロローグ・転生者

—え〜と、ここどこだよ……。あれ……。俺どうなったんだっけ？

—あゝ、思い出した！ヤクザにボコされて死んだんだっけ。

たくっ、初対面でちよつと無礼だったくらいで殺すことなくね？

???「いや、あれはお前が悪いだろう？」

突然、真っ白な空間から声がした。……まさか……。

黒一「神か……。？」 ???「ご名答。」 黒一「じゃ……。死んだのも……」

神様「いや、違うよ？あれは、お前がどーみても悪かったろ。」

黒一「それより……。これは、転生パターンか？……。まさかね……。」

いや、このパターンは良く聞くけど・・・現実に起こるなんて・・・。

まあ、これが現実かどうか分かんが。

神様「おお、正解。ま、気まぐれなんだけどね^^」「まじかよ!」

神が、遊び半分で転生とかさせていいのかよ!?

だめだ、コイツ偽神だ絶対。はあ、夢覚めねエかな・・・。

神様「残念ながらリアルだから。つか、偽神じゃないから!」

もついいよ。とりま、相性的なものでREBORN!世界な。

「

話進められたし!どんだけ、てきとうなんだよ!

でも、こいつに付き合ってたら話がなかなか・・・。よし、諦めよう!

黒一「はいはいOK、OK、原作知ってるし。だから、早くしろ。」

神様「まー、実はミスでお前を殺したんだけど・・・。「ああ？」

いや、何でもない！ほら、プレゼントもって早く行け！」

何、この逆切れ気味な対応！ミスなら最初から言いやがれ偽神！！！！

とか、言ってるうちにとある一戸建ての家の中にいた。

ん？メモと・・・ダンボール・・・？俺はス。ークか！

黒一「なになに、WELCOME TO REBORN'S WORLD

あの偽神が死ねばよかったのに・・・。

- 原作の・・・初めらへんです！これ以上は聞くな・・・。

おいおい、やけにアバウトな設定だな！

- 家は勝手に建てさせていただきました。割と上等な家です。

- プレゼント（ダンボール）説明。

- お馴染みのリング！おまえの波動は太陽属性だ。
サンフレア

- 天体7属性のボス設定。
アストロバディーノフアミリー

しらねー！オリ設定キター！

- 原作とは絡ませるからそのつもりでね。

- 武器は、お前の好みを予想して弓と薙刀な。資料も用意していた。

- 他の守護者は後々出会えるから安心なさい！

いや、お前が弄くった世界は不安だらけだよ！

- まあ、近いうちにまた会おう！エンジョイしてくれ。

アディオスだぜ！

あれ、ほんとに神かよ……。キャラもイマイチ分からん。

あ、まだなんか書いてある。

- 追伸 初心に戻り、中一からスタートしてくれ！

死ね。2度死ねッ3度死ねッ！何が楽しくて中一のガキと。

。

黒一の学年は中3であり、後輩やガキが苦手。まさか自分が中一とは……

資料を見たところ、学校は明日から。はあ……。

黒一「まあ、仕方ない。とりあえず、リングを装着してと……。」

リングの形は菱形で中央は真紅に染まったとても美しい宝石^{いし}

周りを炎のように揺らめいたオレンジの金属(?)で覆ってある。

そう、リングに炎を灯そうとしているのだ。

黒一「俺の覚悟……それは、偽神をぶっ飛ばすこと
!!!! ボウ!

灯ったな、大き過ぎるな……。よし!調整終了。

これが太陽炎^{サンフレア}か。」

見た感じ、シモンファミリーの大地の炎にも似ている。

それよりも、少し黒っぽく紫が入ったかんじだ。

その後、弓と薙刀の練習をした。弓は素引きで……。

黒一「もう……寝よう……。」疲れ果ててベツトに倒れ
こんで就寝。

波乱万丈のREBORN！転生物語、遂に始まる！

ブローグ・転生者（後書き）

まあ、こんなものです。偽神も言っていました、天体の守護者は後々登場予定です。

いつであるかは、定かでないですが・・・

何か・・・もう弾けちゃおうか！（前書き）

アストロパディーノファミリーの守護者登場予定です。

季節は秋に設定しています。

お馴染みキャラも登場します！

第2話スタートです。

何か・・・もう弾けちゃおうか！

〽次の日〽

黒一「よくよく、考えたら外見同じなのに中一っておかしくね？はあ・・・遅刻ギリギリで行くか。」

登校時間は8：30。現在8：10分。並中までおよそ20分程度。

鞆には何かしらの偽神から貰った資料。ダンボールに入ってたグルカナイフ。(メモには書いてない。

あゝあ、エンジョイできんのか・・・。どーせ、学校にいったら獄寺とかが「10代目10代目！」

とか、言っただろーな・・・。そして、山本の「まあまあ！」発言が・・・。考えただけでウザい・・・。

〽並中・1-A〽

先生「え」と、今日から並中に転校してきた斉藤 黒一だ。黒一、挨拶だ。」

黒一「（転校じゃなくて転生だな．．．）．．．．．
．．．．．」先生「おい！黒一！もういい、座れ

獄寺「てめエー！10代目の前で、失礼だろうが！」沢田「ちょっ！獄寺君！」

山本「まあ、まあ、落ち着けよ獄寺！」うわー、予想通り．．．
季節は秋。何かあったっけ？

沢田（さ、斉藤さん、雲雀さんくらい怖い．．．）そんな、沢田に眼を飛ばしてみる。

リアクションはウケル。が．．．授業は憂鬱以外の何者でもない。

＼4時間目終了＼

ようやく、至福の昼休だぜ！屋上で昼寝でもするか？雲雀をボコして。

噂をすればなんとやら。噂の本人登場！

雲雀「・・・君かい？赤ん坊の言ってた相当の実力者というのは？」
なぜ、リボーンが知っている！？

黒一「知らん。」 雲雀「赤ん坊はリングをつけていると言っていた。・・・君の中指。」

しまった・・・リングを外しときゃよかった・・・。

黒一「人違いだ。」 雲雀「問答無用だよ。咬み殺す！」 カキン
！ トンファーとナイフがぶつかる

グルカナイフを持ってきて正解だった・・・。リボーン・・・次会
ったら偽神といっしょにぶっ飛ばす！

雲雀「ワオ！・・・やるね・・・。」 トンファーさえ封じればい
い・・・。全力で雲雀にタツクルする。

突然のタツクルに雲雀は対処しきれず黒一と共に地面に転がる。あ
んまりやりたくないが・・・。

隙をついて、雲雀の両腕にグルカナイフを2本とも突き刺す。

雲雀「ぐう・・・、僕の負けだよ・・・。」 トンファーから手を離したのでナイフを抜く。

俺は黙って立ち上がった。雲雀「次は負けないから・・・。」 ふん、どうだか・・・。

雲雀はナイフの怪我など無かったかのような振る舞いで黙って廊下を歩いていった。

よかった・・・誰も見てなくて・・・。てか、なんで誰もいない？

その答えは簡単だった・・・。黒一「応接室・・・。」 まあ、こんなところでもこねエよな・・・。

???「見事だったな。」 黒一「・・・リボーンか？」 リボーン「正解だぞ。」

ぶっ飛ばそうかと思ったがさすがにやめといた。

黒一「雲雀で俺を試したのか・・・。そもそも、なぜ俺を知っている？」

リボーン「さすがに、勘がいいなアストロパラディーノファミリー

10代目ボス。「長げエ……。」

お前のファミリーとツナのボンゴレファミリーは同盟を結んでるからな。

それより、見事だったぞ！雲雀を、ああも容易く倒すなんてな。「武器を封じただけだ……。」

めんどい……。なんで、ボンゴレと同盟結んだよ！意味不明過ぎる……。

リボーン「アストロファミリーの9代目から並中に転校することを聞いたんだ。」

正直、俺も驚いたぞ。後で、ツナ達ともボス同士として会ってやってくれ。」

断ろうか……。いや、考えてみればせっかく転生したんだからしかもREBORN!の世界に……。

なら、派手に暴れてやろうか！よし、決まりだ。

黒「分かった。放課後、正式にご挨拶に向わせていただきます……。」

リボーン「ああ、楽しみにしてるぞ。（ツナと比べ物にならないくらい強いな。）

→そして、放課後→

沢田「だ・か・ら、俺はマフィアになんかならないんだってば！」

リボーン「生意気だぞ！ ドガ！」

言うまでも無く、蹴り飛ばされた。沢田（はぁ・・・、何でマフィアに会わなくちゃいけないんだよ・・・）

黒一「・・・ボンゴレ10代目ボス。遅かったな。」 沢田「さ、斉藤さん!？」

黒一「そうだ。俺がアストロパディーノファミリー10代目ボス・
斉藤 黒一だ。」 沢田（長い・・・）

黒一「お前とじゃれあう気はないが、先代が決めたとおり一応よろしくたのむ・・・。」

沢田「いや、俺はマフィアとかそういうんじゃないんで！黒一「甘ちゃんだな……。」

獄寺「てめエー、俺が黙ってみてりゃ10代目に無礼なことばかり言いやがって……！」

茂みから、獄寺が飛び出してきた。ストーカーかよ。

黒一「るせエ。事実だ。」 獄寺「もう、許さねエ！2倍ボム……！シュー……！」

馬鹿だろ、こいつ。沢田「獄寺君、危ないよ！」 まあ、聞こえてないだろう。

リボーン（フッ、また、お手並み拝見だな。） 黒一「チイツ！（炎を使うか……。）

サンフレアの特性は触れた対象物を燃やし尽くし炎として吸収すること……。

昨日、特訓で発見したので真実かどうかは分からない。（偽神がメ

モリ忘れていました。」

リングを放たれたダイナマイトに向けて微弱な炎の幕を放った。

それは、ダイナマイトを一瞬で燃やしてサンフレアに吸収されて消えた。

獄寺「なッ！？」「 沢田「ええ！？」「 リボーン（今の一瞬で何が起きたんだ？）

黒一「これで、終わりか不良少年？」 獄寺「そんな、馬鹿な・・・」。

挨拶もこの辺でいいかな？じゃあ・・・リボーン「待て黒一。今の一瞬で何をした？」いえるわけねエ。

黒一「んー、ダイナマイトが自然に掻き消されたんじゃない？」 リボーン「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

そついや、他の属性って何だろう？火星^{マーズ}とか？まあ、いいか。

疲れたが、家には食料が無い事を思い出した。金の方は寝ている間に補充されるらしい。（便利だな）

コンビニに寄ってみる。何か、ラピュ。タのム。カっぽい人に出会う。ム。カ？「じゅ、十代目！」

まじかよ・・・ム。カが守護者かよ・・・黒一「お前は・・・？」
ム。カ「お久しぶりです。」

ム。カ？「昨日、正式にファミリーの火星マーズの守護者に任命された月影 ハイドです！」

黒一「・・・そうか、ム。・・・ハイド、よろしくな。他の守護者は？」

ハイド「10代目の元に終結しつつありますが全員揃うには数ヶ月かかるかと・・・。」

あれ、何か獄寺に似てね？火星マーズ・・・か。俺と炎かぶってるんじゃないか？
ねエか？

黒一「・・・炎を灯せるか？」 ハイド「炎・・・？」 黒一「いや、なんでもない。」

まだ、知らないか。火星マーズのリング・・・アストロリングでいいか。

ハイドのは赤紫色の宝石だ。よかった似てなくて・・・。

黒一（まあ、なんだかんだ言っつて面白くなってきたな・・・。）

。転生して（産まれて初めて？）初めて笑ったのがこの日だった・・・。

何か・・・もう弾けちゃおうか！（後書き）

リングは、アストロリング天体指輪と命名！シンプル・イズ・ベスト！

てなわけで、ム。かならぬハイドの登場！勿論、グラスン（？）してます。

はあ、亀更新にならないことを冀います。

黒曜の馬鹿共と出会った。。。 (前書き)

日常編はかなりすっ飛ばす予定です。

1話ごとに季節が変わるくらいのペースです。オリの日常になるかな？

まあ、第3話スタートです。

黒曜の馬鹿共と出会った。。

（並森の中）

あ、勘違いするなよ？並森の森って意味だからね？え、何でこんな
トコにいるかって？

黒一「第三……引分……離れ！つてめんどくさい
！何で、弓なんだよアーチェリーにしろよ！

資料に書いてあるプロセスいちいちやってたら殺されるわ！
本来は第三前にも7つあります

そう、現在はあまり練習できない弓を森の中で試射している。

資料に書いてあるプロセスめんどくせエから以後は第三からやるこ
とにしよう。

黒一「まあ、弓はこんなもんでいいだろう。ヴァリアー編までに体
力をもっとつけなくちゃな。

「ここら一帯を走って回るか。」

またまた、何でヴァリアー編で体力がいるかって？事は3時間前・

黒一『とつとと・・・喋れ。』 偽神『やっと、起き・・・』とつとと、喋れ。』 ハイ、ワカリマシタ・・・』

うぜエ。どうやったら、こんなにうざくなれんの？

黒一『この際、今度から偽神に名前変更して喋れ。』 偽神「ハイ、ヨロコソデ・・・。』

よし、これで満足・・・。時間と体力をかなり浪費した・・・。

偽神『オホン！・・・要約すると、次のヴァリアー編ではお前ら（・・・）も戦ってもらうからな。』

お前ら（・・・）？要するに、ハイドを中心とした守護者達のことか・・・。

偽神『ネタバレになるからこれ以上の詳細は言えんが、天体7属性の特性を教えておいてやる。』

サンフレア
太陽炎の特性はお前の予測どおりだ。ご名答！

助言すると、死ぬ気の零地点突破・改に応用できるからまあ

試してみる。

ファミリーの役割は、全てのエネルギーの源。つまり、マフィア界の管理人としてだ。

あらゆる者に希望を与え、ファミリーの中心核となる太陽^{サン}。

火星^{マーズ}の特性は三つあり、まずは全炎が対象で触れた炎と同じ属性になる。

そして、火星^{マーズ}は太陽^{くろいつ}が傷ついた分だけ炎圧があがる。

この効果はアストロリング所持者のみ有効で、敵の太陽のダメージ分は上がらない。

そして、一番有力な特性で相手の炎を中和できるということだ。

つまり、自分も炎を使うが必ず相打ちにできるということだ。

役割は、時には自分の炎を仲間に供給し、時には身を張って敵の炎を打ち消す！

太陽^{ボス}が傷ついた時には、代わりとなり敵を打ち砕く……。

太陽^{くろいつ}と最も親しく、常にファミリーのサポーターになる火星^{マーズ}。

水星^{マーキュリー}の特性は全物質の高度を自由にコントロールできる事だ。

つまり、敵の体を軟弱にさせたり、味方の身体を鋼鉄の如く頑丈にすることもできる。

武器も例外でなく、紙切れも鋼鉄の高度と同じにできる。

また、水星マーキュリーは雨属性と相性が良く互いの炎圧を上げられる。

役割は、全物質を創造したとして称えられ全物質を支配する。

どんな条件化に置かれても自在に物質を支配して突き進む水マーキ

星。ユリ

金星ヴィーナスの特性はあらゆる物を接合させる事ができる。

つまり、物質の修復が可能なのだ。人体も例外じゃない。晴れよりは時間がかかる。

また、炎の質を大空の炎のように変える事ができる。調和はできないがな。

質の種類は接合と超火力だ。天体アストロの中で最も炎圧が高い。

火星マーズと似ていて、自分が傷ついた分だけ炎の高度と切れ味や炎圧が全て上がる。

役割は、全てを修復して、時には自らのダメージを相手も与える。

全ての物を修復して、ファミリーの心さえも癒す金星。^{ヴィーナス}

木星^{ジュピター}の特性は最速の炎。つまり、炎を飛ばした時のスピードが最速という事だ。

この特性を活かすのは割りと難しく天体^{アストロ}の中でも真に使いこなせたのは初代だけ。

また、通常時の炎圧なら天体^{アストロ}の中では最も高い。うまく使えば凄い力となる。

勿論、お前の木星^{ジュピター}の守護者は使いこなせるようになる設定だ。

まあ、どんなヤツかはお楽しみつつ一事で。でも、ボンゴレで言うのなら雲雀みたいなヤツだ。

役割は、超火力とスピードで敵を一網打尽にする事。

ファミリーの攻撃の切り込み隊長となり、絶え間なく重攻撃を放つ木星^{ジュピター}。

ボンゴレ嵐の守護者の使命と似ている感じた。

土星^{サターン}の特性は大空・大地・天体の中で一度に出せる炎が最も多い。

質や切れ味は覚悟に委ねられるが、代々土星^{サターン}の炎量は他とは一線を画する。

お前の守護者の覚悟次第で、自慢の炎量で盾にも兵士100人分の火力にもなる。

土星^{サタン}のアストロリングの宝石^{いし}の形が他のリングよりも大きいのも特徴。

その特性から、土星^{サタン}の守護者に合わせての初代が大きさを變更したんだ。

役割は、大量の炎を駆使しレパートリー豊富な戦い方を持つ事。

ファミリーがピンチに陥れば大量の炎で逆境を打ち砕く土星^{サタン}。

最後に月^{ムーン}の特性だ。コイツは太陽^{サン}と真逆の特性を持つ。

あらゆる炎を拒絶して絶対に放たれた月^{ムーン}の炎を破るのは不可能だ。

現在、世界にたった2人しかいない。とても希少な人材だから大事にしるよ。

太陽炎^{サンフレア}と逆だから、反射と言ってもいいだろう。

月^{ムーン}は物質に燃え移りはしない。一度触れたら消滅する。

基本、高度・切れ味は高めだ。コイツも覚悟次第では、無敵の守護者になれるだろう。

役割は、あらゆる攻撃からファミリィを守り、攻撃を必ず貫き通す事。

常に何者にも邪魔されず己の道を究める太陽と表裏一体の月。

ハア、ハア、ど、ドヤー！この設定！スゲーだろ！完璧だろ！

確かに、面白いし個性がある。だが、最後のコメントで感動もへつたくれも無くなった。

ああ、やっぱり偽神なんだと……。説明の最中は、認めてやってたのに……。存在を。

だから、ここはあえて……。黒一「普通。まあまあ。微妙。」
偽神「ま、まったまた〜。」

偽神「じよ、冗談はこれくらいに……。黒一「真実だ。」
……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。」。『

黙りこくつたし。ウザいから、早く喋れよ。黒一「5、4、3、2、…偽神「わ、分かったから！」

おお、俺の意図が分かったか。偽神「最後にこの世界にまた転生者

。ヘルシーがつくアレだ……。

黒一「まさか、こんなトコに来る事になるなんて……。どうしてこうなった……。」

ってことは、馬鹿とインテリ気取りと亡骸（骸）もいんのか？
」

そう、ここはかの有名な黒曜ヘルシーランドという名の廃墟。骸の生息地である。

とりま、中に進入してみることにした。だって、原作のキャラの下見してエからな。

↓ 黒曜ヘルシーランド・骸の部屋 ↓

犬「お前、誰らびょん！」 千種「君……誰……？」 黒一「……骸に会わせる。」

そっぴや、会ってどうするか決めてなかった。あ、そっぴだ！

犬「何イ！骸様に会わせろだと！」 骸「クッフッフ……僕に何か用ですか？」

うわぁ、変な笑い方。まあ、いいか。黒一「俺の名は斉藤 黒一だ。お前に用がある。」

その瞬間、骸の反応が変わった。骸「貴方は・・・アストロパライノの10代目ですね・・・。」

黒一「その通りだ。骸。お前が並中の奴らを潰そうとしているのは調べ済みだ。」

骸「クツッフ・・・それをやめると？黒一「いや、違う。むしろ逆だ。」ほう・・・。」

黒一「俺は、ボンゴレの实力を知りたい。だから、黒曜に加勢する！骸「ッ！・・・分かりました。」

骸「あなたは他のマフィアとは違うようだ。面白いですね。ならその体を私が使ってあげましょう！」

憑依する気か？おもしれエ・・・かかってこいや！黒一「俺に憑依できるかな・・・？」

しかし、また骸の反応が変わった。骸「おかしいですね・・・憑依できません・・・。」マジか・・・。

でも、ここはあえて当然のように振舞っとくか。黒一「俺にや、憑依できねエーつつーの。」

骸「やはり、面白い人ですね・・・。では、正式に承諾させていただきますね・・・。」

黒一「骸。幻覚で面とフードを作ってくれないか？勿論、戦いの時だ。その時の名はブラックだ。」

シンプルすぎるか？いや、シンプル・イズ・ベストだ。

黒一「つつーことで帰るわ。7ヶ月後、よろしく頼むな。骸「ええ・・・。。。」

俺は黒曜ランドを出て、もと来た道辿って家に帰った。だいぶ走ったかな？

くその頃、黒曜では・・・く

骸「斉藤 黒一……10代目アストロは面白い……是非彼も黒曜に入りたい……。」

犬「骸様、だいぶ黒一の事が気に入ってるみたいだぴょん！」

千種「そういえば……黒一はどこで情報を入手したんだろう……？」

それは……神の溝知るところです……。

正月・・・賞月・・・勝月！（前書き）

はい、意味不なタイトルです。

原作にも入りたいという事で、覚えていた正月の話です。

第4話スタートです。まあ、オリジナル設定を加えるけど・・・

正月・・・賞月・・・勝月！

く2011年・元旦く

黒一「転生して初めての年越しか・・・。まあ、今年二回目の年越しだが・・・。はあ・・・。」

今年から、いよいよ戦いが始まるのか・・・。楽しみなような、めんどろなような・・・。

つーか年明けたんだから、守護者くらい挨拶に来いよ！ハイドは来たが。

とりあえず、普通の元旦を過ごしたい。今までの原作は傍観が無視で通してきたからな。

そして、俺は外に向った。

く郵便受けの前く

黒一「・・・ん？招待状？まさか・・・。ファミリー対抗のアレか・・・。」

いや、でも、アストロはハイド以外いないし・・・。は！まさか、守護者が全員集結！」

可能性はある。本来ならキャバッローネとボンゴレなのだが十分可能性はある。

走って、沢田の家に向った。

（沢田家の前）

獄寺「10代目！明けて、おめでとございます！」 山本「
よっ！ツナ。」

いつもの面子が揃っていた。そして・・・イレギュラーなのが7人・
。。。

そのうちの2人は雲雀とハイドだ。残りの5人は初見。

「???」久しぶりだな、黒一。「黒髪のインテリ眼鏡が話しかけてきた。

黒一「・・・久しぶりだな。」とりあえず、合わせておく。???
「ジェイドも継承終わったか。」

陽気そうな茶髪がインテリの事をジェイドと呼んだ。・・・ややこしい。

ジェイド「たり前だろ亮。聖也も黒一に挨拶しとけよ。」うお！雲雀に似てる・・・。

聖也「僕は、力とそれを試すサンドバックがほしくてココにいるんだ。瑠美子代わりにやって。」

瑠美子「月^{ムーン}は太陽^{くろいつ}とは一緒には居られないんだ。

だから、太陽^{くろいつ}に話す事はできない・・・。」色々ムカつく女だな・・・。

和平「やめてください。ボスに失礼でしょう？お久しぶりです。和平です。」偉く落ち着いたヤツ。

俺の推測からして 水星^{マーキュリー}の守護者はジェイド。

金星^{ヴァーナス}の守護者は和平。

木星^{ジュピター}の守護者は聖也。

月の守護者は瑠美子。^{ムーン}

土星の守護者は亮。^{サタン}

火星の守護者はハイドだな。^{マーズ}

そして、太陽が俺。^{サン}

三浦や笹川の妹も集結したみたいだし、そろそろかな。

沢田「ちょ、皆、何で俺のうちに集まってきたの？しかも、この人達は・・・？」

リボーン「俺が正体したんだぞ。沢田「り、リボーンいつの間に！」

リボーン「まず、あそこにいるのがアストロパラディノファミリ―だぞ！沢田（知らねー！）」

今回呼んだのは、代々ボンゴレに伝わる伝統を守って正月合戦をするぞ！

対戦相手は、アストロパラディノファミリ―だぞ！」

え、マジかよ……。キャバロじゃねエのかよ……。まあ、コイツらなら余裕か。

京子「何だか、楽しそうねー」 獄寺「こんな奴らにぜーってー負けねエ！」

沢田「あ！ひ、雲雀さんは何で来たんですか？」うん。俺も知りた
い。

雲雀「僕は個人で出場して勝ったら黒一を風紀委員として連れて行く。黒一「……は？」

赤ん坊の葉書に書いてあった。勝ったら黒一と好きなだけ戦えるって……。」「

偽神のオリジナルシナリオか……。地に墜ちればいいのに。そして堕天使になればいいのに……。

つまり、何か？俺が負けたら風紀委員でずっとこき使われてバトらされるわけか？冗談じゃない！

まあ、たまには暴れるのも悪くないけど……。てことで、河原に行くことになった。

く河原く

リボーン「まず、初めはおみくじだぞ！」 沢田「どうやって、競うんだよ！」

リボーン「大吉は2点 中吉は1点 吉は0点 凶は-1 大教-2だぞ。」

これで、点数を競うんだ。ちなみに、勝った方には賞金1億円だぞ。

負けた方は1億円払えよ。」

京子「1億円かぁー。夢があつていいね♪」 1億か・・・毒サソリがいなけりやGETなんだがな・・・。

了平「うおおお！！！！極限に、俺に任せろ！！！！ここで、大きく差をつける！！！」

亮「俺が出るぜ。先鋒として負けられないぜ!!」 うぜエ熱血漢が守護者かよ……。

三浦「頑張ってください、お兄さん!」 京子「頑張ってお兄ちゃん!」

リボーン「この日のために取り寄せたおみくじワニで引いてもらうぞ。」

川から、おみくじを口に入れただけのただのワニがでてきた……。あ、もう笹川みくじ引きやった。

しかも、複数とってやがる……。反則だろ……。

リボーン「大凶 大凶 大凶 大凶 大凶 凶 大凶 凶 大凶
ボンゴレ - 16点。」

亮「男なら、一発勝負!この1枚に賭ける!」 リボーン「大吉2点だぞ。」

沢田「やばいよ．．．大きく差をつけられちゃったよ．．．」

リボーン「次は羽根突きだぞ！羽子板は50kg、羽は20kgだぞ。沢田「ええ！？」

山本「昔、素振りに使ってたヤツと同じだな。」 雲雀「ねえ、そろそろ始めようよ。」 なに！？

最強の委員長が切り出しやがった。雲雀「とつとと、終わらせたいんだ。」

リボーン「フっ！分かったぞ。なら、この勝負は黒一と雲雀で決まりだな。」 まじかよ！

雲雀「ふうん。なら、いくよ！」 雲雀は羽を上には飛ばし羽子板でなくトンファーで飛ばした。

いきなり、過ぎる！反則負けだろ！リボーン「よし、スタートだ！」
．．．．．

とりあえず．．．．．って、羽子板がないし．．．。ジェイド「ボス、コレを使え！」 おお、サンキュ。

って、薙刀ッッ！何で、持ってたよ……。てやああああああ
あああ！！！！スパッ！

雲雀「ッ！」黒一「よし……。」「リボーン「羽を斬ったから
黒一の負けな。」「……………」

リボーン「しかも、羽はもうないから黒一の負けだ。」「雲雀「行
くよ黒一。」「

ああ？何で、アイツ薙刀渡してきやがったの？アイツ、インテリジ
ヤないの？ああ、連衡される……。。

ハイド「ボ、ボス！」仕方ない、行くか。黒一「大丈夫だ。少し行
ってくる……。。」

ここで、日常は終了。オリジナルの日常へと繋がってしまった……。

（応接室）

雲雀「まず、ここにサインして。風紀委員に入るための書類。」「
黒一（逃げられない……。）」

まず、ココで逃げたらクソめんどいことになりそうだな。

適当に入って、適当にしとけばいいか。黒一「O K O K。はい、サイン。」雲雀「コレ付けて。」

手渡されたのは風紀委員の腕章。コレつけると人をあんま寄せつけなくなりそうだな。

便利アイテムGET！雲雀「基本、学校生活は自由でいいよ。でも、仕事とバトルはしてね。」

完全に手玉に取られた。うん、終わったな^^だが、諦めはしない・

自由ということは雲雀と同じ。〓学校はフリーダムを獲得したことになる。

めんどくさいヤツもうまくいけば拒絶できるな。

黒一「とりあえず疲れた。休ませろ。その後戦ってやる。」雲雀「いいよ。僕も疲れたし。」

意外と話はできるみたいだな。あゝあ、完全にオリジナル走ってるなこりゃ・・・。

明日からは、アストロパルディーノファミリー・ボス兼風紀委員としての人生スタートか。

正月・・・賞月・・・勝月！（後書き）

3：00に起きて深夜更新しました。頭狂ってますww

再び就寝ですzzz

裏の天体 アストロロベッショ（前書き）

ちよつと、ネタばれ気味の回です。

第5話スタートです。

なのに、何故黒^{アイツ}一が10代目なんだ！！・・・なら、勝手にさせてもらう・・・。」

ヘルラは既にハイド達以外の守護者を揃えていた。無意味だったが。

しかし、これで納得いくわけない。裏切ったファミリーへの復讐。そして、リング略奪。

表のリングは継承されたが、まだ裏が残っている。ヘルラはそれを知っていた。

初代の時代だけに存在したとされる幻のリング。アストロリング・ロベツシヨ。

その昔、二つの天体^{アストロカザータ}一族が対立していた。どちらが天体を守るかだ。

そして、両者は同等のアストロリングを作り上げた。結局、勝ったのは表のほうだった。

裏のアストロリングは今でも基地の地下室で厳重に保管してある。

く後日の同時刻く

ドカーン！！！！ 基地のあちらこちらで煙がたちのぼっていた。反対だ。

ヘルラ「死ね、裏切り者め！灼熱斬！！！」カルーラタツリヤーレ
「　　ノーノ「ヘルラ・・・」

アストロ・ノサシフレア
9代目が太陽炎となり消えていった。抵抗はしなかった。

???「ボオス！見つけたぜエ。アストロ天体の負の遺産。ボスのご先祖様の形見。」

ロベツシヨ・アストロリングの事だ。ヘルラは9代目の玉座に座って不適な笑みを浮かべた。

ヘルラ「返してもらいますよ。アストロロベツシヨ僕達の遺産を・・・」

玉座から立ち上がり、歩いて地下室まで向かった。

「地下室」

正式なアストロリングは代々のボスの部屋にあるのに対してロベツシヨの方は・・・。

地下の奥深くの部屋に石造りの台座に各リングが埋め込まれていた。

しかも、特殊なチェーンが巻いてあった。このチェーンは裏の一族による鍵（封印）だ。

表の天体^{アストロ}が使えないように裏に受け継がれる太陽のみ解除可能だ。

台座には窪んでいるところがあり、チェーンを解くための炎をここに注ぐのだ。

ヘルラは自分のつけているランクAのリングに限界まで炎を灯した。そして窪みに注いだ。

パアーン！ ランクAのリングが割れた。その代わり、鎖も砕けた。

ヘルラ「今、再び僕らの初代が天体^{アストロ}を支配する！ ルース、喜びを分かち合おう！」

アストロ・ルース。ルースは火星^{マーズ}だがロベツシヨの血筋だ。

ルース「ああ。・・・これで、ようやく先代達の念願を叶えられる・・・。」

ヘルラは興奮のあまり、台座の中央に埋め込んである自分のリングを石ごと筆記取った。

「???」おいおい、ボス。気を確かにもてよ。台座ごと削ってるぜ。」

ヘルラ「わかってるよ……。これくらいしなきゃ実感が沸かないんだよ……。」声が震えている。

リングは黒い。とにかく黒い。各属性のアイコンが宝石に描かれている。

それ以外は正式のASTロリングとまったく同じだ。

そして、全てが狂い始めた……
……。……
。。。

- - -
- - -
- - -

この日より、ASTロパライノファミリーは実質は裏の手に堕ちたのだった……。

裏の天体 アストロロベッショ（後書き）

短めです。仕方ないじゃん！今日、テストだしww

点数のほうはまあまあ取れそうかな？ってくらい。

感想まってます^^

進級もしたし戦いの準備もできた。（前書き）

勉強で疲れたので、なんとなく更新！

正直、黒曜編にはオリ要素をそんなに加える気はなくすぐ終わらせます。

基本、この作品はオリジナルの話は書かない方針で行きたいと思います。

第6話スタートです。

進級もしたし戦いの準備もできた。

「只今、パトロール中……」

俺は、現在パトロつてます。風紀委員としてだが、学校もサボれるし後悔はしていない。

それと、俺にはかなりの走りがいることも分かった。雲雀を倒した武勇伝が広まっていたそうだ。

例えば、黒一「おい、お前ちょっと自販機まで走ってこい。」不良「は、はい！黒一さん！」

雲雀倒すくらいで権力が手に入るんなら何度でもアイツブツ飛ばしてやるよ。

俺はさつき手に入った缶コーヒー（あつたかい）を飲み干し並中に帰還中。

「並中・応接室」

黒一「パトロ終わった……。」雲雀「そう。じゃあ、僕の相手をしてもらおうか。」

さすがにダルイ……。なので、攻撃を受け流しつつ校内を飛び出

した。

屋上だが、ナイフを巧みに使って並中にある並森一高いといわれる木めがけて跳んだ。

そして、ナイフを突き刺して摩擦による反発力で無事地面に落下。

↓逃亡

黒一「・・・時期も時期だし、黒曜に行ってみるか。フードと仮面も欲しいし。」

あ、仮面は髑髏のデザインを頼んだんだよな・・・。」

黒曜らへんから沢田達とも深く関わるようになるのか・・・。リング争奪戦・・・か。

リングといえば、アストロリングは封じないとまずいな。予備のリングをつけなければ。

予備のリングは偽神から貰った。ランクCが3つ　ランクBが3つ　ランクAが3つ。

そして、偽神に波動とアイテムを追加してもらった。右に大空と霧、左は残りの5つ。

ランクAは太陽二つと大空。ランクBは霧・嵐・雲。ランクCは雨・晴・雷だ。

アイテムは、太陽炎凝縮ブースター……まあ、ジェットシューズだ。

サンフレア
太陽炎を凝縮して放つことにより空を飛べる。武器にも転用可能らしい。

ここまで来ると、能力的にも復讐者越えてね？時空を超えた覇者になってね？

まあ、とりあえず黒曜まで行ってみる。。

（黒曜・骸の部屋）

骸「クフフ……待っていましたよ。フードと仮面を受け取りにきたのでしょうか？」黒一「ああ。」

よく分かったな……。骸「ほら、よく似合っていますよ……。」「ん……………」

アイツ、幻覚で作った仮面とフードを直接着せやがったのか。

黒一「サンキュー……。この幻覚は消えねえだろうな？」骸「勿論です……。」

原作でもクロームの内臓は消えなかったから問題ないか。用もこれ

だけなので帰宅。

あ、フードと仮面ははずした。

く自宅く

黒一「やべエ、超暇だな……。守護者も、なんだかんだでイタリアに帰ったっていうし……。

にしても、イタリアに帰るなんて急な事言いやがって……。

く

一応、全員でなく残っている奴もいる。月と木星だ。会いに行くか
ん、待てよ？木星って何か気をつけなきゃいけないことあったよな
？なんだっけ……。？ま、いいや。

確か、アストロの日本支部にいますとかいないとか……。てなわけ
で、行ってみる。

く高度10000m上空く

最初は心配だったが、10000mくらいなら身体に特に異常はなかった。

これくらい飛んどかないと、下界からはつきり見られてしまうからだ。

黒一「空気抵抗でこれ以上加速できねエ……。なら、炎を張って大気を拒絶してみるか。」

つまりは呼吸できないわけであり、せいぜい飛びながらだから30秒が限界だ。

しかし、スピードは10倍ほど跳ね上がった。すると、日本支部が見えてきた。

くアストロパラディーノファミリー日本支部く

部下達『ようこそ、日本支部へ。ボス。』 黒一「ああ……。」「さすがは、基地だけの事はある。」

中に入ると、部下1「ボス、お預かりしていたリングはどうなさいますか？」 黒一「ああ？」

まあ、そういう設定なのだから仕方ない。話によると、俺はアストロリングの偽物を預けたらしい。

なぜ、アストロリングの偽物かというとカモフラージュ用だという。

精製度はランクAらしい。

俺の予測では、裏の天体とかが奪いにくるんじゃないかな？一応、受け取った。

そして、月は後回しにして木星に会いに行った。

〈聖野の部屋〉

部屋には、本、本、本、書斎・・・いや、図書室と言ったほうがいい。

聖野「なに、黒一？」　黒一「・・・つくづく、雲雀に似てるな。」
聖野「ッ！！！」

何か、まずいこと言ったかな？　ギリギリ！　襲われてるんだけど
^^：

黒一「な、なんだよ！」　聖野「あんなのと一緒にしないでくれ。
ろくに炎もだせないんだろっ？」

そりゃそうだが・・・。ちなみに、聖野は両手に鋭い鉤爪みたいなクローを持ってます。

聖野「この際、このまま戦いを続けよう。僕はこのためにアストロに入ったんだ。」

黒一「しゃーない。付き合ってやるよ！リングの炎は？」ありだよ。

「

聖野は^{アルティッリョ}鉤爪刃に炎を灯した。聖野「あと、コレもありだから。黒一「？」」

そういうと、ジャケットから現代では存在しないはずのハコがでてきた。^{ボックス}匣・・・！？

俄かに、信じがたいが間違いないだろう。聖野「君で試してみるよ。開匣・・・。ドウ！ドウ！」

二つの^{ボックス}匣を開匣させた。どこで、こんな物を・・・。試作品か？

聖野「^{ヴェローチェル・獣ユレヒター}迅速狼！木星の最速の炎を味わいなよ・・・。」

2匹の狼は不規則に俺のまわりを巡回している。素早すぎて目に映らないほどだ。

カキン！ カキン！ カキン！ カキイイーン！ 黒一「こんなも

のか？」 聖野「・・・行け。」

シュパ！ シュパ！ 何かが俺の体を引き裂いた。シュパ！ シュパ！ シュパ！ シュパ！

やばい！狼の連携トラップに引っかった！諦めるわけにいくかあああ！！！！

黒一「サンフレアエツフルーヴィオ放射型太陽炎！！！」太陽炎が放射状に広がっていく・・・。

目に見えなくても、何もかも焼き尽くせばいい！という、思いから生まれた技。

聖野「・・・へえ、まさかここまでするなんて・・・！！！！！」
ドカーーーーーーン！！！！！！

聖野の部屋は吹っ飛んだ。おそらく狼ごと聖野も倒せたはずだ。黒一「はあ、はあ、・・・。」バタ！

黒一はひざまついた。煙がはれてきて、聖野が蹲っているのが見えた。聖野「やりすぎだよ・・・。」

勝負し掛けて、ボックス匣まで使った奴に言われたくない・・・。

もちろん、部下が駆けつけて聖野の部屋が使えなくなったのは言う

までもない。

〔聖野専用研究施設〕

ここは、聖野が所持している研究施設でボックス匣もここで作られたらしい。話によると、以前ヴェルデが視察した時に作ったのだという。あれ、おかしいな？

アルコバレーノ編で試作品ができるはずなのに、これは既に完成している。

聖野「僕の炎で、完全な物に仕上げたんだ。完成品は世界でこれだけだよ。」

ずるすぎる……。何で、コイツだけ持ってんだよ……。聖野「君にはコレをあげるよ。」

そういつて渡してきたのはボックス匣だった。聖野「僕の炎じゃ開かなくてね……。」

ただ、ゴミ押し付けてきただけじゃねエか！聖野「君宛に預かったんだ。……いらないの？」

ボックス俺宛のボックス匣……？ありがたく、頂戴する。

そして、月には会わずに家に帰還した。

「家」

黒「ちょっと、試してみるか。ボウ！ ドウ！ パシューン！」
何が出たのか……。

出てきたのは……
……
……矢？しかも一本？ウケル……。

注いだのは太陽属性。太陽炎の矢……？意味が分からないのでし
ばらく封印。

それが再び開匣されたのは未来編のお話だった……。

進級もしたし戦いの準備もできた。(後書き)

次話から黒曜くヴァリアー編というかんじになります。

いよいよ、ヴァリアー編がきますよ！日常は鹿十ですが・・・。

感想まっています^^

眠い・・・zzz

ブラッド・オブ・ボンゴレ（前書き）

黒曜編の話を書くのはこれで7回目です。

エラーやバックしちゃったとかの関係で小説が悉くデリートみたいな感じです。

もはや、呪われてるようにさえ思えてきますww

いい加減、この回に飽きてきた……。いや、本当に。

ですので、黒曜編とヴァリアー編の始まりを繋げますww

呪いの第7話スタートです

ブラッド・オブ・ボンゴレ

〔黒曜ランド・映画館〕

俺のつけている仮面は変声機能付。フードは気配を消してくれる。

恐らく、超直感には気をつけないとバレるな。

ここは、黒曜の映画館。現在、骸が五の道の能力を発動させようとしている。

そしてツナは勿論、超死ぬ気ハイパーになっている。かの有名な小言弾だ。
・
・
・
・
・

俺が超ハイパーになったらどうなるんだろ・・・？なんちゃって・・・。

最近、自分でもキャラ崩壊したなった自覚してきた。そろそろ、戻さねば。

無駄話はこの位にしておいて俺は部屋の外でコソコソして様子を伺っている。

中では気味悪い骸が気味悪い笑みを浮かべてやがる。そして、こんな会話も聞こえた。

沢田「獄寺達をやったブラックもお前が操っていたのか・・・。」
骸「いいえ、違います。」

あんま、余計な事喋られると・・・骸「彼は、自分の意思で動いています」・・・。

沢田「お前の、ろくでもない仲間というわけか。」骸「黙りなさい。沢田 綱吉」

何か、骸がムキになったな。俺でなく、仲間を馬鹿にされたからだろう。しばらく実況。

あ、そうだ！獄寺や山本は俺が先にやっておいたんだ。雲雀も軽く。

ドガ！ 沢田「うわぁ！」 沢田は壁にぶっ飛ばされた。骸「クツツツフ・・・」

^{ハイパー}超ツナ「お前の力がこんなものなら拍子抜けだぜ・・・。」骸「ッ！ー！！」

沢田はグローブに炎を灯していた。だいぶ、らしくなってきたな。

骸「まるで、毛を逆立てて体を大きく見せようとする猫ですね・・・」

だるくなってきた……。ああ、眠い……。俺は夢の世界に迷い込んでしまった。

起きた時には、骸がくたばっていた。そろそろ、バミューダ来るかな……。？

あ、復讐者か。ん……。？何か、マントが……。綻びかけている……。？骸がやられたからか。

沢田「誰だ、出て来い！」　チッ！まだ、超^{ハイパー}だったか……。ま、少し暴れるか。

^{ブラック}黒一「よお、ボンゴレ。」　沢田「骸なのか……。？」
え、マジで？

本人には、分かんねエからな。変声した時の声。^{ヴォイス}

^{ブラック}黒一「会うのは初めてかもしんねエが、骸じゃねエぞ？手合わせしてやろうか？」

沢田「お前はブラック！臨むところだ！皆の仇をとってやる！」

ブラック
黒一「こい。」

コイツなら多少炎を使っても大丈夫だろう。ツナ「うおおお!!!」
るせエ……。

ブラック
黒一「サンフレアエツフルーヴィオ
放射型太陽炎……（小言で言った）。」

ランクAの太陽属性のリングをはめて、炎の幕を放つ。今回の見える。

やりすぎたら、沢田が炎になっちゃうので程々だ。中傷くらい？にしとく。

リボーン（黒一の技と似ているが、構えが違うな……。）特訓しましたから^^

だが、さすが超^{ハイパー}。持ち前の推進力で回避しやがったうぜエ……。

沢田「俺は、ここだぜ。」
ブラック
黒一「おせエ……。」
ドカ！蹴り一発。

ブラック
黒一「おいおい、自前の推進力もこんなものか？」
沢田「くっ・

「。。」

沢田「俺は・・・負けない！」　リボーン「やめとけ、ツナ。」

沢田「リボーン！」

リボーン「今のお前じゃ話にならねエぞ。俺らと比べ物になんねエ程ブラックは強い。」

黒一^{ブラック}「嬉しい事言ってくれんじやん。アルコバレーノ、リボーン。

ルーチエは元気にしてつか？・・・って今はア

リアか？」

ちよつと、わざとらしくアルコバレーノの話題を振る。

リボーン「何故、ルーチエの事やアリアの事まで知っているんだ？」

黒一^{ブラック}「お前らが、俺と匹敵する強さになったらな。」　沢田「・・・。。。。。。」

ブラック
黒一「お前より強い奴は他にもいるぞ？例えば・・・跳ね馬、ヴァリアー？」

「ここも、あえて予感させるような口調で言う。おっと、フードが。ここまでだな。」

ブラック
黒一「じゃあな。」

リボン「また会えるか？」

ブラック
黒一「ああ。」

そして、黒曜編は幕を閉じた。俺が強すぎて、すぐ終わっちまったよ。

～並盛・アミューズメント会場の外?～

正確な名称は知らんが、ヴァリアーがやってくるポイントに到着。

沢田達について行かねえと辿りつかないか……。尾行あるのみ！
という魂胆だ。

今は、外で笹川妹に労ってもらっている感じだ。さあ、来い！カス毛・・・ロン毛！

ドカー

ン！！！！ 来たな。

バジルがボロボロになっている……。しばらくのやり取りはカット……………。

沢田が動き出す前に、俺乱入！ 黒一「待て、カス毛。」 スクア

ーロ「あゝあゝ？」

沢田「さ、斉藤さん！？」 リボーン「何でお前がいんだ？」 黒一「……………」

スクアーロ「て、てめエは、10代目アストロ……。……うゝおおい。笑わせてくれるぜ！！」

黒一「るせエ。」 スクアーロ「お前は表の奴だ。だが……。真のアストロはヘルラだ！」

え……………。今、何つったよ。ヘルラって誰？表って何だよ！

黒一「はあ？俺が10代目だ。」 スクアーロ「うゝおおい。てめエは今のアストロを知らねエ。」

スクアード「実質は、ヘルラが全て握ってんだよ！アストロロベツ
シヨリングもな！」

新手的リング？恐らく、俺らに対抗しゆるリングである事は間違いないだろう。

リボン「なら、黒一の守護者がイタリアに戻ったのもそのせいかな。・。・」

スクアーロ「だから・・・ここで、掻っ切っても問題ねえんだよ！
！！」 剣を振りかざした。

黒一「カスは俺に勝てねエ……。」
スクアーロ「ッ!!」リン
グで攻撃を凌ぐ。

今度は俺の番。この日のために持ってきた薙刀でカス鯨を斬りつける。

軽く、服を掠つた。が、何か笑われたし……
 ……炎使つてやろうか……。

スクアーロ「てめエは、ただ刃をがむしゃらに振り回してるだけだ
あ！！！！」

原理を理解していねエ！！！！」火薬をお見舞いされた。

が、逆にその程度で怯む分けなく太陽炎で火薬を相殺・・・いや、
吸収した。

だが、スクアーロの嘲笑は止まらない。スクアーロ「ルースウ！！
！！！！」

ルース・・・？ルツスーリアの事か？いや、違う・・・。アストロ
の波動だ！

その直後、俺の真横に金髪が混じった人の良さそうな好青年が現れ
た。

ルース「こんにちは、表の《・・・》アストロ10代目」黒一「て
めエは誰だ？う・・・。」

横腹に何か熱い物を押し付けられた。とても濃い赤黒な炎だ。恐ら
く、火星^{マーズ}。

にしても・・・うう・・・熱くて鋭い。だが、負けじとこち

らも炎薙刀で返す。

が、ルースの炎の色が変わった。太陽炎だ。サンフレアそして、炎薙刀に応戦してきた。

ルースは現在、拳に炎を灯しているだけだ。まずい・・・火星の特性を忘れていた。

薙刀の炎は中和されて掻き消された。だが、ルースの炎は消えていない。

ルース「僕の炎は絶え間なく灯されています。だから、関係ないのです。」

黒一「負けてたま・・・うう!!!」ルース「終わりです。腹を殴られた。」

俺は倒れた。そして、ルースは俺の右中指のアストロリングを持ち逃げした。

スクアーロは沢田の首を絞めて偽ハーフボンゴレリングを奪い、最後に・・・。

スクアーロ「アストロオとヴァリアーアは協定関係にある!!!!裏の天体だあ!!!!

今回は、黒一に免じてその命を預けてやる！首洗って待つとけエ！！！」

ルース（斉藤 黒一・・・とるにたらん男だ。ヘルラこそこのリングにふさわしい・・・。）

・・・というのは嘘で、今までのも半分演技。全ては、だいたい予想はしていた。

偽神の偽アストロリングという演出。即ち、新手の登場も予感した。そして今に至る。

さつき、やられたのもわざとだ。俺だって絶え間なく炎を出せる。

だが、敵《裏の天体》を侮ることはできねエ・・・。

アストロ本部奪還作戦（前書き）

更新遅くなりました。やはり、不定期です。

今回は、イタリアに帰った4人に纏わる話です。

第8話スタートです。

アストロ本部奪還作戦

「アストロ本部周辺・森林地帯」

アストロ本部の周りは、敵の侵入を拒むため大規模な森林地帯となっている。実況：作者

そこで、現在は火災とか何やら起こっている。黒曜編のちょい前の話だ。

そして、アストロ本部の正面ではジェイド以外の守護者がバトルしていた。

2・3部隊程が援護していた。守護者は全員リングに炎を灯せるようになってる。

ジェイド「本部の全方位、抜かりないか……。手薄なのは東側だな。」

ジェイドは頭^{ヘルラ}の狩ることが任務だった。表のバトルは囷だ。

属性的にもジェイドが最も適任であるからだ。え、何故、月と木星が居ないかって？

それは、日本に敵の守護者4名が向かったとの情報が入ったからだ。

黒一達には伝達して日本支部を守っている……。という、設定にしておいた。

黒一は知らないだろうが、ストーリー上そうさせてもらったのだ。すまない……。

ジェイドは、東側の城壁に着くと適当に見張りを排除して水星の炎で壁を脆くした。

そして、軽く壁をけると容易く碎けて内部に侵入できた。

「アストロ本部」

守護者は表のカモフラージュでドンパチやっているが、頭は別だ。^{ヘルラ}

ジェイドの武器は基本、火炎放射器。見た感じただのスプレー缶だ。中身は、普通の火（と言っても、3000度だが）と水星の炎と切り替え可能。

さっきの壁も、この火炎放射器でぶち破った。スプレー本体は特殊金属で精製された。

下っ端複数「て、敵襲……！」 ジェイド「この数なら水星の火炎放射だな。」

ジェイドはスプレーの口を大きくして拡散型のした。 「水星炎！！」
「マーキュリーフレア

あたった者の体と武器は脆くなり、敵は立っている事すらも困難になっ
ていた。

その場を駆け抜けて頭を^{ヘルラ}目指して走り抜けた。

「アストロ本部・玉座」

ヘルラ「待っていたよ。ジェイド・アストロ。」 ジェイド「久しぶり
だな。」

デジャビュ・・・？黒一の時も同じ「久しぶりだな。」だったのか。

そして、ジェイドはスプレー二缶の口を絞り通常の炎に切り替えた。

何だかんだ言っ
て、物理的なダメージを与えるにはコレが一番いいのだ。

ボオオオオオ！！！！ 射程は10～15程度が限界だ。 ヘルラはかわ
すが・・・。

周りの物質はドロドロに溶け出した。そもそも、ジェイド自身も危険な技だ。

へたすりゃ、灰になってしまふ。一応、熱が伝わらない構造だが。

ヘルラ「そんなもの、当たらなければどうと言うことは無い！くらえエエエ！！！」

ヘルラは手の太陽炎をジェイドに押し付ける。しかし、ジェイドは避けない。

ジェイド「掛かったな！^{マーキュリーフレア}水星炎！！！」　ヘルラ「ッ！！！」

淡くて濃い青色の炎がヘルラを包み込む。完全に命中したはずだ。の、はずなのに……。

ヘルラ「危なかったな……。水星の炎の特性を完全に忘れていたよ……。」「ジェイド「……。！」

ヘルラはジャケットを脱いでいた。よく見ると太陽炎が付着している。そして燃えた。

恐らく、直前にジャケットに太陽の炎を纏わせ水星の炎を吸収した

のだらう。

ヘルラ「君の品の無い武器には飽きたんでね。こっちから、行かせてもらおうよ！！！」

ジェイド「アストロを汚そうとする奴に言われる筋合いはない！！」

ヘルラは腰にある剣の柄に手をやった。よく見ると、先がない。柄だけだ。

ジェイド「お前、ふざけてるのか？」　ヘルラ「まさか。本気だよ。メガネクン。」

ヘルラは柄を抜くと、炎の刃が現れた。どうやら100%炎で出来た代物らしい。

形は定かでなく、常に揺らいでいる。形も変幻自在ということだらう。

ジェイド「サン・コルトロ太陽刃・・・！」　ヘルラ「サンフレア太陽炎は纏わせられないんでね

こつする

しかないんだよね。」

ヘルラ「いくよ！カルーラタツリヤーレ灼熱斬！！！」
ジェイド「くっ！……………」
・・。」

刃が3つに割れた。と、思うとジェイドに向かって床を破壊しながら刃が飛んできた。

リーチ：∞ 威力：計り知れない………… スピード：瞬きできない・
・ 鬼神である。

ジェイドは火炎放射器を構える。溶岩の2・5倍の熱を誇る代物だ。しかし、炎の刃には適わないようで。ジリジリとジェイドに迫ってくる。

ジェイド「…………まずい。燃料が切れ掛かる！！！」
ヘルラ「この程度かい？」

遂に燃料が切れた。が、すぐに炎を切り替えた。マーキュリー水星の炎だ。

ヘルラ「無駄だ！そんなもの当たらなければ意味がない。」
ジェイド「そりやどうか？」

ジェイドは拡散式に変えて、辺り一面に炎を振りまいた。当然、威力は落ちる。

ジェイドは、装飾品である銅像に隠れる。ヘルラ「馬鹿め……。」

このままでは、確実にジェイド諸とも吹き飛ぶだろう。が、そうはならなかった。

ジェイド「甘いぜ、ヘルラ。硬化を使わせてもらったぜ。」ヘルラ「チイ！……。」

よく見ると、ジェイドの腕には先が割れた槍が装備されている。側面には円形の物が。

そして、地面にはふたが開いたハコ《……》が落ちていた。ヘルラ「何だ、それは？」

ジェイド「一か八かの最終兵器さ。試作だからいつまでもつか分かんが。」

そう言うと、火炎放射器のカービン状の弾《燃料》を円形の部分の下から取り付けた。

ヘルラ「現代科学の最新兵器と言ったところ・・・かな？」　ヘルラは炎を射出した。

ジェイド「フレイムハットロッドラ堕ちろ！水星弾！！！！！」　ヘルラ「っ！！！」

ドカーーーーン！！！！！！今度こそ部屋が吹き飛んだ。しばらくして、煙も晴れた。

ヘルラは消えていた。大方、どさくさに紛れて逃げ出したに違いない。

ジェイド「逃げ足だけは速いな・・・。ま、奪還完了ってことで。」

「アストロ本部周辺の森？」

ヘルラ「はぁ・・・はぁ・・・。油断した。もう少し炎の炎圧を下げていたら・・・。。チィ！撤退だな。」

「？？？ボス、敵の一人に妙な兵器を使ってくる奴がいる。これ以上は無理だ。」

ヘルラ「僕も、そうしようと思っていたところだ。ラストル。全員に伝える。」

こうして、アストロ本部奪還作戦は大成功に終わった。

しかし、そう簡単にはいかなかった。ロベツショ連合軍が再度、攻めて来たのだ。

炎を使える物は極少数だったが、手勢が半端なかった。長期戦は始まった。

このような事態が起きたため、黒一とは連絡が取れなかったのだ。

以上がアストロ本部奪還作戦の報告だ。

アストロ本部奪還作戦（後書き）

更新遅れて、すみません。

アストロ×ボンゴリング格争奪戦（前書き）

更新遅れて申し訳ございませんでした・・・。

強いて言い訳をすると文化祭の準備とクラブの両立が原因です。

修行は、あえて飛ばします。手に入れた力は後々分かります。

今更ながら、アニメに沿ってこの小説は進みます。

第9話スタートです。

アストロ×ボンゴリング争奪戦

く並盛の・・・・・・・・・・どっか

ここがどこかは、アニメでも漫画でも観て推測してくれ。いわゆる、想像にお任せします。

ヒント：目の前にレヴィとマーモンがいて、その他の幹部+@がいます。

もう、お分かりだろう。ランボが狙われたっーか、バトル開始のアレだよ。ほら。

沢田「お前らはヴァリアー！！！」 スクアール「それだけじゃねえぞおおお！！！」

ヘルラ「僕達がいることを忘れてもらっちゃ困るなー。綱吉クンに黒一クン・・・・」

どうせなら、リングの争奪戦はアストロとボンゴレ一緒にやろうかなってね♪

タッグバトルだけど・・・妙な兵器は使つの禁止だから・・・」

黒「そやまた一方的だな。誰が従うか……。」ヘルラ「守護者が死んでも？」

リボーン「タッグバトルは予測していたが、ということだヘルラ？」

ヘルラ「こないだの作戦、失敗したのは知ってるでしょ？あの時の人質……。

ジェイドとかいうメガネくんなんだよね。」

ジェイドが……。というより、まだ守護者が聖野と留美子以外揃っていない。

ヘルラ「君の仲間もある程度傷つけといたから、争奪戦に間に合うかどうか……。

ジェイド君は残念だけど棄権だから。」

獄寺「そんな条件、一方的過ぎるだろ！」沢田「そ、そんな、ど

うしよう・・・。」

そう言つて、ヘルラは悩んだようなポーズをとる。かなり、ムカつく。

黒一「やはり、お前はアストロ10代目に相応しくない。10代目は俺になる！」

ヘルラ「ッ！・・・まあ、いいや。間に合わなかったら君たちが不利になるだけだし。」

今日の午後11:00に並中に集合だよ。詳細は現地で。
じゃあね。」

全員、消えうせてしまった。まったく・・・どんだけ、わがままな人だよ。

リボーン「いいのか黒一？」 黒一「いいも、なにも、アイツをぶっ飛ばすのみだろ。」

その一言で、周りが団結する。もちろん、俺はお断りだが・・・。

リボーン「フっ、だな。」 沢田「絶対、ジエイドさんを助けるんだ。」

力の差を理解しろよ……。俺等と次元が違うんですけど……。

黒一「てめエは、足引つ張んじゃねエぞ。」 獄寺「なッ！てめエ、10代目の好意を……！」

こうして、いつものループが始まるのであった……。

～その日の夜・並盛中～

みると、カスクアーロやカッスーリアがいる。カが気になるところだな。

ヘルラ「さあて、こっちは揃ってるけど……。君のところは揃ってないみたいだね。」

XANXAS「……御託はいい。さっさと始めろ。」 ヘルラ「せっかちだな、まったく。」

こっちの守護者は全員身構える。無論、俺もその一人だ。

ヘルラ「ハンデとして、揃ってるペアから始めてあげるよ。」 黒
「調子にのんな。」

ヘルラ「・・・じゃあ、まず嵐と火星のリング争奪戦でもするかな。」

だいぶ、原作とは違うな。ま、王子のナイフとワイヤー捌き見て
みたいし？

獄寺「誰が負けつかよ。ハイドと俺の怒涛の攻撃に敵う奴はいねエ
！」 ハイド「同感だ。」

ベル「ししっ」俺とラストルが勝つに決まってるじゃん」 ラス
トル「ケケっ」愚かな愚民が」

右腕チームVS変な笑い方チーム といったところか。

チエルペツロ「審判は、私達が務めさせていただきます。全員、校

舎に入ってください。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1981x/>

家庭教師ヒットマンREBORN！ ～転生者と天体7属性来る！～

2011年11月15日12時03分発行